
Disturbed Hearts

炊飯器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i s t u r b e d H e a r t s

【Nコード】

N 9 4 5 4 Y

【作者名】

炊飯器

【あらすじ】

地図から忘れ去られた漁村ボンゴで育った少年、ロイ・クレイス。平凡だが幸せな日々を送っていた彼の人生は唐突に終わりを告げる。1人世界に残された彼は復讐のために立ち上がることを決意する。

設定・登場人物紹介（前書き）

小説の進行状況に合わせ、随時更新します。

設定・登場人物紹介

【人物】

・カオス 数百年前に魔物・妖怪を封印したザイガの英雄。自身も共に魔界に封印したといわれている。

・ウラルⅡジエルトン かつてカオスと共に魔の封印を行った男。封印後は解除の時に備えて「ジエルトン」を結成、精霊術を伝える。

《ボンゴ》

・ロイⅡクレイス 14歳。茶色い髪に白い肌、漆色の目をしたボンゴの少年。父、母、祖母との4人暮らし。父親であるガイを尊敬し、いつか力になりたいと日々修練に励んでいる。身長160cm前後。魔物に復讐心を持つ。ボンゴ唯一の生存者。

・ガイⅡクレイス 村の漁船の船長。身長180cm超。村人と同じく色黒で濃い黒髪。

《ジエルトン》

・ギン 金髪に青い目で黒いローブを愛用している。美男。三兄弟の師範でロイの恩人。カリュー中腹の小屋に住んでいる。何事も面倒くさがり、重要な時しか行動しない。24歳。

・ヘルゲン 三兄弟の長男。18歳。

・オルソー 三兄弟の次男。無口。

・アンゴラ 三兄弟の三男。

【地形】

・ザイガ 中心のタンタニア大陸、北東のバーカギル。北西のロスターニヤ、南東のジラビア、南西のクルシスの各大陸と大小さまざまな島からなる。共通通貨はピークル。

《タンタニア》

・ボンゴ 大陸の最南端に位置する漁村。北方にカリユーがそびえているため、交易をほぼ完全に断ち、自給自足の生活をしている。

・カリユー ボンゴの北に位置する山脈。標高はあまり高くないが、広大で身を隠すにはうってつけの場所のようだ。通っても南にボンゴがなく、広大すぎるため、人はほとんど通らない。

【魔】

《妖怪》 鋭い爪ととがった耳を持つ種族。背格好は人間と変わらないが、その力は凄まじい。生まれながらにして2つの能力を持ち、譲渡も可能。

・ガイガン 擬態 魔界では晶霊石の石切り場で働いていた。

《魔物》 能力を持つ獣。先天的に一個体にひとつの能力を備

えている。

・リヴァイアムース 水 A ボンゴを襲ったラブカに似ている魔物。水の球に入って空を舞い、水鉄砲を発射する。ただし、一度出した水の球は解除するまで移動できない。水鉄砲は遠距離になるほど拡散し、殺傷力が落ちる。

《魔獣》 獣が進化し、通常では考えがたい巨大さ、強大さを持ったもの。しかし、その定義は人間による偏見が大きい。

【古代】

・魔天転器 ボンゴに奉られていた古代兵器。どうやらザイガに複数あるらしい。魔界と人間界をつなぐ役割を果たすもの。晶霊石だけはその影響を受けない。

【ジェルトン】

ウラル＝ジェルトンが結成した組織。目的は自衛及び魔物の討伐。情報の漏洩を防ぐため、孤児や、一子相伝で伝えられている。自分を証明するものとして、銀色の指輪が用いられている。「real world」を教典としている。

【精霊術】

森羅万象に精霊が宿っているとした太古の考えに基づき、それらを自在に操る能力。

？開眼
がある。

精霊術を発現させること。剣の素振りなど様々な方法

・熱 熱を直接使用し引火させたり、筋肉を活性化させて身体能力をあげたりできる。

・風 風を自在に操り、自身や物を持ち上げて軽くしたり、真空波を飛ばして遠距離のものを斬ったり出来る。

プロローグ

遙か昔、人類が出現して間もない頃。この星ザイガには魔物や妖怪達が溢れ返っていた。人類との共存を許さなかった彼らは人間を喰らい、人々は日々怯えながら暮らしていた。

人類出現から数万年、一人の青年がついに魔物たちを封印した。その青年の名はカオス。彼は、封印が解かれた時にそなえ、自らの体を魔物や妖怪と共に封印したという。

彼はその間際に一つの予言を残している。

『例えこの世にいかなる光が宿ったとしても、闇が栄え、悪が生まれるときがくるだろう。』

物語はそれからさらに数百年後

第1話 ロイ「クレイス」 1

青空に包まれる海の上で、海鳥が羽の白さを自慢し合いながら羽ばたいている。その鳴き声と、ゆったりと流れる波の音色はハーモニ―となって小さな漁村、ボンゴを包んでいた。そのまま静かに時が過ぎようとした刹那、村に突然大声が響き渡った。

「ロイツ、聞いてんのかいつ!!」

初老の女性の怒鳴り声が海を正面に臨む木作りの家から上がった。屋根に群がっていた鳥たちが一斉に飛び上がる。この家はクレイス家。家長は漁師、その妻は主婦という、この村の90%の家と同じ職業の平凡な家庭だ。その家の中では手作りのテーブルをはさみ、浅黒い肌の初老の女性と真っ白な肌の少年とが向かい合って椅子に座っていた。ロイと呼ばれた少年は椅子の上でストレッチしながらぞんざいに応えた。

「聞いてるも何ももう覚えたっつうの!」

子どもにそう言われたことに怒りを覚えたのか、しわくちやの女性は眉間にさらに皺を寄せた。

「じゃあ、さつさと剣の稽古に行つてい!」

「へ〜い」

「なんだいその返事は!ほんとに怒るよ!!」

その言葉に押し出されるように、ロイは家を駆け出した。

「ばーちゃんはうるさいな!。若い頃は村で一番の美女って呼ばれてたなんてとても信じられん」

家の外に出ると大きく伸びをした。目の前に広がるのは一面の海。夏らしい入道雲が沖合に見えている。ふと目を向けると、最近作りなおされた栈橋の端で老人が1人釣りをしていた。祖母に言われるがままに稽古に行く気になんてとてもなれず、なんとなくそちらの方に足を進めた。

「おお、ロイ。相変わらず怒られてるな。ここまで声が聞こえたぞ」
この村での老人の定義は息子が一人前になった後、引退して船に乗らなくなった男を指す。この老人も数年前に足を悪くして漁師を引退したが、長年鍛えられた体は健在だ。絶対に釣りをするより素潜りした方が魚が取れるとロイは思っている。

「大人が漁に出てると静かでいい。ま、淋しくはあるがな」

老人はにやつと笑った。ロイも首肯する。港につながれた船もなければ昼間から続く酒盛りの声も聞こえない。男たちは今漁に出ているのだ。

「それはそうと稽古に行かないとまたどやされるぞ」

そういう老人にロイは唇を尖らせた。

「俺は早く漁師の仕事を覚えたいのになんでその鍛錬が木刀振ることなんだよ。意味わかんね」

「伝統なんだ。ガイだつて、お前の祖父さんだつてみんなそうしてきた」

「わかったよ。行ってきます！」

声を荒げてそう言うと、家の方に戻り、家の裏にある１メートルほどの木刀を手に取って、林の中へと駆けて行った。

「船が帰ってきたぞー」

その言葉が聞こえてきた途端、汗を額から滝のように流していたロイの表情が明るくなった。耳を澄ますと、木の船が帆をはためかす音がかすかに聞こえる。ロイは振っていた木刀を放り投げて、一目散に潮の香のするほうへと駆けて行った。

クー、クー、クー

先ほどまでいっぱいに風を受けていた帆はきれいに巻かれており、船はロープで結わえられている。先ほどまで船底に詰まっていたであろう魚達は港に置かれた木の箱に小分けにされていた。

「これ、東の方に運んどけ！・・・おいそこ、休んでんじゃねえ！」

野太い男の声が響いている。筋骨隆々の黒光りする体をした中年の大男だ。名前はガイ。この村の漁船の船長で、ガイとの関係は

「おかえりっ、父ちゃん」

ロイはガイに近づき、声をかけた。ガイは振り向き、ロイに気付くのがしがしと力強く頭を撫でた。

「おお、ロイ。ただいま」

15歳のロイはこれでも160cmはあるのだが、180cmを裕に超えるガイ相手では見上げる形となってしまう。ロイの茶色がかつた髪の色に比べて、濃い黒の短髪だ。ロイは肌も白いので、余計にガイの色黒が目立つ。

「今日の飯はなんだ？」

先ほどの怒鳴り声の顔とはうって変わって優しい笑顔になった。

その日の夜。一週間ぶりの家族全員揃った食事。クレイス家はロイと父母、祖母の4人だ。祖父はロイが生まれる前に、事故で死んだ嵐の日に船を守るために港に出て、波にさらわれたらしい。話によるとガイに負けぬほどの豪傑な人で、葬式には村人全員が駆けつけたとか。とは言っても村人は数えるほどしかないのだが・・・。

「そつえば、漁場の最寄にあるテルの島のキーじいさんが言ってたんだが、海底に設置してあった網が食いちぎられたらしい。」

キーじいさんはこの家の話によくあがる人だ。相当高齢の人らしいのだが、若いころに10mもある鮫を銚で捕ったなんて伝説も残している。テルの島はボンゴから南の方向へ3日ほど船で進んだ先にある小さな島で、人口はボンゴと同程度、面積はボンゴがあるタンタニア大陸と比べれば、気付かないほど小さい。

「じいさんの話だと大型の海底魚がいるって話だ。」

ボンゴ近海は暖かく、漁の条件が良いので、漁師の言う大型ってのは大体が3〜4m以上の魚だ。4メートルは、二階から尻尾を持つ

て（現実には重すぎて無理だが）魚の顔が地面に着くぐらいだと考えればいい。ロイも一度5メートルのフラットフィッシュを見たことがあるが、怖すぎてそれから3ヶ月ぐらいは食卓に上がる魚の種類を每晚確認したぐらいだ。しかし、今となつては気にも留めず、目の前に出された父親の戦利品をほおばれるようになっていた。

漁師は早寝早起きが他の仕事よりも確立されている。なぜならば、朝早くから仕事を始めることがほとんどの上に、休息を取らなければ命を落とす危険性があるからだ。家長のその生活スタイルは一家にも反映され、ロイもよほどのことが無い限り日が落ちる頃には床に付く。この日も横になり、すぐに眠ってしまった。

パン！・・・パン！

何かが破裂するような音がした。ロイはベットから飛び起き、窓から外を覗いた。

「きゃあああ」

聞き覚えのある女性の悲鳴が聞こえる。それだけではなかった。老若男女の悲鳴が村中に響き渡っていた。その声はあまりに痛切すぎて、絶えるはずのない波の音をかき消していた。ロイは意味もわからないままあわてて家を飛び出した。だが、そこで足が止まった。

それは、あまりにもむごい光景だった。

体が上下二つに分かれている漁師がいる。あそこにうずくまっている女性には右肩から先が無い。その切れ目からは血が止め処なく噴出し、辺りに血の池をつくっていた。その先の林にいる人は首から上が無い。先ほどまでその人を支配していた脳は・・・その隣の樹の幹にへばりついていた。

「ゲエエエエ」

ロイはその場にうずくまって嘔吐した。もし、彼ら、彼女らが見知らぬ誰かだったらもしかしたら耐えられたのかもしれない。しかし、そこにいる人たちはロイが生まれたときからの知り合いで、家族同然に接してきた人たちなのだ。だが、そんな人々の命はあまりに容易く散っていった。

ようやく胃から出すものがなくなって顔を上げると、うずくまっていた女性は目を見開いたまま動かなくなっていた。池は次第に固まり、黒さを増す。ロイは再び吐き気を催したが、もはや胃液しか出なかった。

パン！・・・パン！

「何かが弾けるような音」は途切れることなくまだ続いていた。それは上空から聞こえてくるようだ。ロイは顔を上げ、明るみ始めた空を見た。

それを見た瞬間は、何かなんだかわからなかった。何か青いものが空に浮いている。よく目を凝らして見ると、水のようなだ。大きな水の球体が空に浮かんできて、そこから弾けるような音にあわせて、水鉄砲が発射されている。水鉄砲と言っても手で作るようなかわいなものではない。今、その水鉄砲のひとつが樹の幹に当たり、樹をなぎ倒した。その水鉄砲は樹の幹の幅よりも大きい。

「なんだ、あれ・・・・・・？」

ロイがそう思ったとき、朝日がそれを照らした。

中には魚がいた。樹の肌みたいな色をした魚。よく見ると、深海魚に特徴が似ており、陸上動物にはありえないほど口が大きい。対比させるものが無いので大きさはわからないが、さっきの水鉄砲の大きさと比べると軽く10メートルはありそうだ。それが球体の水の中泳いでいる。その動きはまるでこの光景を楽しんでいるかのようだった。

「ちくしょう、どうなつてんだよ・・・」

そうロイが悪態をついた瞬間！水鉄砲がロイめがけて飛んできた。
「危ねえ！」

ロイの視界は右へと引つ張られた。

「おい、ロイ！大丈夫か！？」

どうやらガイがロイを突き飛ばしたらしい。ガイの右腕には水鉄砲がかすったのか、血が滲んでいた。

「くそっ、こつちだ、走れ！」

ガイはロイの手を引いて村の広場の方へと走った。上空の魚は、動かない人間を優先的に狙うらしく、ロイたちのほうは向いていなかった。

村の中央には石でつくられた塔がある。それほど高いものではなく、見張り台として使われている。何でも、村をつくってから建てたものではなく、ここを拠点に村を作ったというのだからかなり古いものだ。その塔の下は、村の備蓄庫になっていて、時折来る盗賊にも開けられないように頑丈に造られている。

「ここに入れ、早く！」

ガイは、持っていた鍵で錠を空け、ロイを中に入れた。自分もその中に入ると、扉を閉めた。

「全く、お前はいつまでも朝寝坊だな」

ガイが微笑んだ。その顔は今まで15年間慕い続けた「父ちゃん」の顔だった。

「なんだよこれ・・・」

ロイは俯き、震える声でその言葉を喉の底から押し出した。

「いいか、現状だけ言っておく。お前と、殺された村人、そして俺以外は村の離れの避難所にいる。母ちゃんも一緒だ。だが、ばあちゃん・・・助けられなかった」

ロイの頭の中で何かが崩れる音がした。今まで家事やら父ちゃんの手伝いやらで何かと忙しかった母ちゃんの代わりにロイにいろんなことを教えてくれた・・・。その光景が脳から溢れ出てくる。

「あれは恐らく・・・魔物だ」

それ以外考えられない。それは子供であるロイにも分かった。あんな獣がいるはずが無い。確かに魔物は封印されただけで、まだ生きているとも教えられていたのだが・・・。

「いいか、お前はここにいろ！」

ガイが、先程よりもさらに真剣な顔をして言った。

「お前『は』って、父ちゃんは？」

「このままあいつらにここに巢食われちゃあ避難してるみんなが生活できねえ、塔にある古代兵器を使う」

「兵器？」

「爆弾だ！」

それは初めて聞く言葉だった。古代兵器？爆弾？そんなものがこのボンゴに？

そう思ったとき、はつとした。

「じゃあ、父ちゃんはどうなるんだよ！？」

「・・・村のみんなのためだ」

ガイの顔に少し笑顔が戻った。それから小さく溜息をつくとき、ロイの目をまっすぐ見た。

「その前に、お前に教えなきゃならんことがある。お前の生い立ちのことだ・・・。俺も母ちゃんも若かった頃・・・今よりもっとだ。母ちゃんには幼馴染の女がいた。その人はこの村に迷い込んだ旅人の男と恋に落ちてな。実は・・・お前は・・・その二人の間の子だ。母ちゃんだ産んだ子供じゃ、ない」

目の前が真っ白になった。それはあまりにも唐突過ぎて、重すぎる事実だった。

言葉は出てこない。今にも意識を失いそうだった。ガイの言葉だけが静かに脳の中を何度も反響していた。

「その男はまたすぐ旅に出て、その女はお前を産んですぐに死んだ。母ちゃんは実は病気でな。子どもがつかれない体だったんだ。だから、俺達がお前を引き取ることにした」

そう言われたとき、なぜか妙に納得できた。ロイの容姿はほかの村人と違う。肌が白いのも髪の毛の色が薄いのもロイだけだ。

「俺と母ちゃんはないなあ、女が死ぬ間際に約束したんだ。何があっても守るってなあ。だからよお、ここにじっとしていてくれ」

ガイは今にも泣きそうな顔をしていた……。それはロイも同じだ。わかってる。今すぐにガイは死別する。

「わかった」

そううなずいたロイの頭をガイはガシガシと撫でた。

「それでこそ俺の子だ！いいか、忘れんなよ、お前はあの二人から血を受け継ぎ、俺達から愛情を受け継いできたんだからな」

涙が止まらなかった。これがロイが自分の目標にしてきた「父親」の最期なのだ。

「じゃあな、ロイ！ちゃんとでつかくなれよ！！」

ガイは扉を開けた。先ほどから続く水鉄砲の音がさらに激しくなる。

「と・・・父ちゃん！！」

ぎい、バタン。重々しい音をたてて扉は閉まった。水鉄砲の音は弱くはなったが、已然として鳴り響いている。

ダウン！！！！

世界が揺れた。壁際に積んであった木箱は転がってくる。ロイは反対側の壁に近付いて、それをかわした。しばらくすると音が完全にやんだ。とめどなく続いていた水鉄砲の音も聞こえない。水鉄砲は止まったのにロイの目から溢れる涙は止まらなかった。

いつもの夜だったはずだった。朝になったら港に行ってガイを手伝って、剣の稽古をつけてもらって、疲れて帰って母ちゃんの美味しい飯を食って眠る。何で、どうしてこんなことに。

壁の上に積んであった小箱が崩れ、ロイの後頭部めがけて落ちてき

た。視界はすぐに黒くなり、何も見えなくなった。

第1話 ロイ「クレイス 2

それからどれくらいの時間が経ったかわからない。ロイは倉庫の中の物を何とか喉に押し込み、何日かをそこで過ごした。

涙が止まらなかった。父親はもうこの世にはいない。その事実がロイの孤独感をさらに加速させた。扉には鍵がかかっていなかったが外に出ることはなかった。ガイの話では母親や村民の何人かはまだ生きているはずだ。ならば貯蔵庫にある食料は不可欠なものなので必ずこの場所は外から開けられる。開かないという事は周囲に誰もおらず、まだ安全ではないという事なのだろうと考えた。

涙がようやく収まったころ、1人でいることに限界を感じてゆつくりと扉を開けた。避難所から戻ってきたみんなが復興作業をしているかもしれない。そんな期待をこめながら

「なんで……。なんでなんでなんで！」

そこには何も残っていなかった。まるで知らないどこかに迷い込んでしまったように、何も無い世界だった。

「どう、して……………」

真っ白な世界。そこにたたずむのはロイ一人。

「どうして!!」

ロイは膝をついた。さっき抱いた期待はただの虚構だった。世界と同じくそんなものはどこにもなかった。

村は無かった。ロイが15年間暮らした家も、棧橋も、剣の稽古をした林も、みんなが働いていた港も、みんなが避難しているはずの遠くの離れも……。全てが、この世界から削り取られていた。残ったのは、白い砂と白い塔、そして肌の白い自分だけ。既に枯れたはずだった涙が再び流れ出す。

白い世界は慟哭に包まれた。

「やはり何も残っていないか・・・」

一人の人間がボンゴの跡地を眺めていた。紫に近い黒いローブを頭から爪先まですっぽりと被っている。

その人間が海のほうへ向かって歩いていくと、真正面に白い建物を見つけた。

「なんだ、やっぱりあるじゃないか。」

そう呟きながら建物に近づくと、そこには少年がうつ伏せに倒れているのが見てとれた。

「おい！」

男は駆け寄り、少年を抱きかかえた。息はちゃんとしている。ローブの人間は安堵の吐息を漏らすと、少年を建物を背もたれにして座らせた。

「うつ」

少年は苦しそうに顔をしかめると、目を開けた。その少年の目に男は少し戦慄する。少年とは思えない、一片の光も見いだせないような闇色をしていたからだ。

「おい、水だ・・・飲めるか？」

男は懐から水筒を取り出し、少年に飲ませた。

少年は掠れたか細い声で何か問いかけたようだったが、男には聞こえない。

「立てるか？」

男が顔を覗き込むようにしてそう尋ねると少年は小さくうなずいた。男は少年を立たせると塔の下にあった空間に少年を担ぎながら入っていた。どうやら村の備蓄庫のようだった。ものが散乱している。砂が入らないように扉を閉めると、少年の方に振り返った。

「私の名前はギン。ここの北の山、カリューに住んでいる者だ」

そういつて、ローブのフードを取った。金色の髪に青い目をしてい

る。顔は少年が今まで見たこともないほど整っていた。

「君は・・・ボンゴの者だね？名前は？」

少年は頷いた。

「ロイ・クレイス」

言葉にも表情にも目にも何の感情も見いだせない。

「ロイ君・・・か。君はどうして助かったんだい？」

ロイはかすれる声で静かに話し始めた。突然、空飛ぶ魔物に襲われたこと、父親が村を守る為に古代兵器を爆発させたこと、そのせいで村人も村も消し飛び、後には自分とこの塔だけが残ったこと。

その話はロイが主人公のはずなのに、なんの抑揚も感情もなく、まるで遠い昔の伝説を聞いているようだった。

「当てはあるのかい？」

ロイは落ちくぼんだ目をギンに向けると首を横に振った。ボンゴは南を海、あとは山に囲まれた土地で、完全自給自足の生活をしている。ロイはこの村から出たことすらない。他の村人もボンゴ以外に知り合いもいなかったはずだ。

「わかった、それじゃあ、私についてきなさい」

ギンは言って立ち上がった。ロイに向かって手を伸ばす。

「どうしてですか・・・？」

乾いた唇がかすかに動く。いや、かすかにしか動かせなかった。

「多少の衣食住は面倒を見てあげる。体が回復したらカリューより北の街に行けば最低限生きていくくらいはできるだろう」

「生きて、いく・・・・・・？」

ギンの目が鋭くなり、ロイを睨むとロイの胸倉をつかみ、持ち上げた。つま先が浮いている。苦しくはないが、身動きは取れない。何が起こっているのか理解するよりも先にギンの口から叱責が発せられた。

「お父上は最期に言ったんだ！何を願ったんだ！生きるんだよ！君は死んだか？生きてるだろう！君が生きなきゃ誰がお父上の勇姿を讃えるんだい？誰がその勇敢な魂を受け継ぐんだい！？」

ロイの目から、またしても涙が溢れた。すっかり痩せこけてしまった頬に涙が伝う。

「わからないよ……。なんで、どうしてこんなことに……………」

「

ギンはロイをゆつくりと床に下ろし、持っていた水を再び与えた。

「さあ急ごう。いつまた魔物がくるかわからない。とりあえず、この倉庫にも食料や路銀はあるはずだ。ぐずぐずしている暇はない」
そう言っ、倉庫を物色し始めた。品の選別の手際のよさをロイはぼーっと眺めていた。

「さあ、出発だ」

しばらくして、倉庫の中のを結局ほとんど背負い、笑顔とともにギンは言った。

カリユーの山は、それほど高いものではない。しかし、途方もなく広く、草木が生い茂っていて人はなかなか通らない。ガイも若い頃に登ったことがあるらしいが、途中で帰ってきたそう。山を越えた向こうにあるという麓の町までの道のりの半分ぐらいは行ったらしいが、それでも丸2日かかったという。

ロイはギンの大きな歩幅に四苦八苦しながら歩いていた。途中見たこともない獣や蛇、虫など様々な生きものがいたが、ギンは気にしていなかった。恐らく害はなかったのだろう。ただ、山に入る前に、大きな牛みたいな生き物を見たら即座に伝えるように言われた。ギンはそれ以外にはほとんど喋らなかった。ロイも喋る気はなかった。

ボンゴを発ってから丸一日。そこについたときにはギンの表情も見えないくらい辺りは暗くなっていた。

家があった。ロイの家と同じぐらいの大きさだ。丸太でできていて、結構頑丈そうだった。

「ただいま」

不思議なことにこの家に扉はない。奥を見れば部屋らしきものはあるが、大きな机やいすが置いてある場所は屋根があるだけで、吹き抜けになっていた。

「あれ？誰もいないのか。しょうがないな」

口ぶりから、2人以上の人間がほかにもいることが窺えたが、今のロイにはそんなことに気づく余裕はなかった。山登りで体力がないのはもちろんだが、それよりも気力の方が底をついていた。

結局、一番奥の部屋を案内され、そこにあったベッドに倒れ込み、気を失うようにして眠った。

第1話 ロイ「クレイス 3

目が覚めると、室内は窓から差し込む夕焼けの赤に染まっていた。見慣れない天井を見上げて、見慣れない狭い部屋を見まわした。しばらく考え、昨日何があったのかを思い出した。

ベッドから体を起して逡巡する。前にベッドで寝たのはまだ幸福だった時だったか。思い出してももう涙は出なかった。それは時間が経過したからなのか、心が死んでしまったからなのか、自分ではわからない。

ただ、思い出される言葉があった。ギンと名乗った怪しげな男の言葉、ロイに生きろと焚きつけた言葉。だから、とりあえず生きておこうと思った。

「足、いて・・・」

じっとしていることが嫌いで普段から走り回っているのに、両足に体重をかけようとした途端に筋肉が悲鳴を上げた。痛みをこらえながら立ち上がると、倒れるようにして外開きのドアを開けた。

ゴンッ

何か固いものに当たったらしい。まさか壁があってちょっとしか開かないようになっていたのか？設計ミスか？と思い、ドアノブに体重を預けながら少しドアを引いて外を見た。

「誰っ!？」

そこには筋骨隆々の大木のような男が立っていた。どうやらドアは壁ではなく、この男の額に当たったらしく、男は無表情で額をさすっていた。顔は怖い。生まれてこの方、ロイが人の顔を怖いと思ったのは初めてだ。

「どうしたオルソー？」

右の方から野太い声が響いてきた。そして顔をのぞかせたその声の主を見て、ロイは目を見開いた。

「お、同じ顔だ・・・」

双子という概念を知らなかったロイにとって、その光景はホラーだったらしい。しばらく男を指差したまま固まっていた。

額をさすっていた男は何も言わずに歩きだしたので、ロイは何となくその後をついていった。

真ん中に大きな木造りのテーブルがある部屋だった。テーブルの上にはランタンが1つだけ置いてあり、火が灯っている。この部屋には夕日は差し込んでいない。窓は東向きなのだろう。

「やあ、ロイ君。おはよう・・・というにはもう夕方だね。この場合なんて言えばいいのかな？」

大きな机に座っていたのはギン。そしてその横に座っていた男の顔を見て、ロイは意識を失いかけた。

そう、彼らは世にも珍しい3つ子というやつだったのだ。

「この子はロイ君。戦利品だ」

軽く咳払いして、ギンは言った。男たちはそれぞれ椅子に座った。

ロイの目の前には太い丸太があつたので、とりあえず腰かけてみた。反応を見る限り、間違っではないなかったようだ。

「もう少し売れそうなガキはいなかったんですか、お頭？」

ギンの隣に座っている男がにやにやと笑いながら言った。同じ顔だが、先ほどオルソーと呼ばれた男とは表情が全く違う。オルソーは一言も喋らないし、仏頂面のままだ。

「これじゃあいっても5万ピークルがいいところだ。ま、好き者の婦人なら買ってくれるでしょうが」

ピークルと言うのはザイガの星共通の通貨らしい。らしい、というのはボンゴでは貨幣経済そのものが成り立っていなかったで、ロイはお金と言うものを見たことがないからだ。だからそれがどれくらい価値なのかわからない。

「えっと・・・買っつて・・・？」

徹頭徹尾、話が全く見えてこない。

「冗談だよ」

ギンはくすくすと笑った。4人の中で唯一顔の違うギンは恐らく3

人よりも若い。だが隣に座っている男が少しだけ丁寧な口調で喋っていたのが気になった。

「じゃあお頭、やっぱり戦利品は食料だけですかい？」

倉庫の中の食糧をギンはまとめていた。戦利品というのはおかしいが、あれは火事場泥棒のようなものなのだろうか。ロイは更に警戒心を強める。

「うーん、労働力、かな？」

「は？」

ロイは首をひねった。さつきから話がなに1つ見えてこない。

「あ、ごめんごめん、言うの忘れてたよ。いや、君がずっと暗い顔をしてたからなんか独りになりたいのかな」と思っでき、こっちも話しづらかったんだけどね。まあ元気になったみたいだから大暴露大会催しちやおうかな、うん。実はだね、私たちは盗賊なるものをやってるんだよ。あつ、でもとって食わないから安心していいよ。その代わりにちょっとやってほしい仕事があるんだ」

昨日、ここに来るまでまったく喋らなかったギンが矢継ぎ早に話し始めた。あつけにとられたロイは、ギンの言葉を全て理解するのに相当時間がかかった。

「盗・・・族・・・？」

ボンゴに足を踏み入れた理由。カリューに住んでいるわけ。そして何のためらいもなく倉庫から食料を持ち出したこと。確かにつじつまは合う気がした。唯一合わないのはロイがここにいる理由だけだ。それはつまり、生かす代わりに盗賊の片棒を担げと・・・？

「うんそう、決定。じゃあよろしく」

ギンは目の前で手を汚してまで生きることを選択すべきか迷っているロイを無視して勝手に決定した。

「えと、こっちからヘルゲン、アンゴラ、オルソー・・・だよな？」

「正解です」

応えたのはヘルゲンだけだった。

「で、早速仕事なんだけど」

「えっと、ちよつと・・・ちよつと、待ってください」

ロイはあわてて声を上げた。

「ああつ、ごめん。・・・ロイ、君は僕たちについて生きるか、それともこのままのたれ死ぬか・・・どっちを選ぶ？」

銀は極めて愉快そうに笑いながらロイを見た。

3人が「違うだろ」という目でギンを見ていた。

ロイは混乱する頭の中で、昨日ギンに言われた言葉がくり返していた。

『お父上は最期になんと云ったんだ！何を願ったんだ！生きるんだよ！君は死んだか？生きてるだろう！君が生きなきゃ誰がお父上の勇姿を讃えるんだい？誰がその勇敢な魂を受け継ぐんだい！？』

心は既に決まっていた。丸太から立ち上がって勢いよく頭を下げた。

「よろしく願います」

何があっても、とりあえず生きてみようと思った。それに、なんだかギンなら信用していい氣もしたのだ。

その言葉を聞いて、ギンはニツコリと笑った。

「よろしい・・・ようこそ我らの家へ。で、早速仕事の話だ」

「な、なにをすればいいんですか・・・？」

恐る恐るロイは尋ねる。盗賊という事は犯罪者だ。危険も冒すし悪いこともしなければならぬのかもしれない。しかし、そんなロイの不安をよそに、ギンの解答は実に単純明瞭なものだった。

「う~~~~ん・・・・・・・・雑用？」

第2話 ウラル「ジェルトン」 1

「朝早いけど大丈夫か？」

そうヘルゲンが言った。よく喋るこの男が長男だそうだ。3つ子と
いうのは説明を受けてもよくわからなかったが、要するにんやか
んやで3人同時に生まれたらしい。

早起きは習慣だったので問題はなかった。ただし、夜まで起きてい
るのはなかなかきつい。しかしこの3日で少しではあるが慣れてき
たようだ。

仕事は薪割り、炊事、洗濯、木の実や山菜などの採集が主だ。標高
のそれほど高くないカリューではボンゴの近くに自生している木の
実や山菜とほぼ同じものが採れた。

雑用をしているのは基本的にロイ一人だ。3人はたまに出かけては
獣を狩ってきたり、かと思えば何も狩らずに泥だけになって帰って
きたりする。ギンはいえは一日中机に座ってお茶をすすっていた
り、たまにふらつと出かけたと思えばすぐ戻ってきたりと退屈そう
な毎日を送っていた。

「おお、大変だな、ロイ。ご苦労ご苦労」

ロイがここに来て4日目。黄昏時になり、ランプに火がともされた。
ロイは夕飯のために机を拭いていた。こんなところに置かれている
からか、表面がざらざらしていて、それでいて汚いので面倒なこと
この上ない。そんなロイにヘルゲンが声をかける。それをねぎらい
の言葉ととれるものは相当の聖人であるか、正直者だろう。なんせ、
ロイ以外の4人は椅子に座って何もせずにロイが働くのを見ている
だけのだから。

「まだ汚いよ、ロイ。ほらっ、もっと手を素早く動かして」

今日は結局その場所を一度も動かなかったギンがそう言ったとき、
ロイの怒りがピークに達した。

「やってらんね〜!!」

ロイは布巾を床に叩きつけた。本当ならギンに投げつけたいところだった。そうしなかったのは助けてくれた最低限の恩義というやつだろう。

「何で俺がこんなことしなくちゃなんねえんだ、面倒くさっ!!」3日も正直にやってた俺も馬鹿だけどっ!!」

地団駄を踏みながら叫んだ。

「あんた、暇なら手伝えよ!!」

力強くギンを指差す。それを受けて、それまでにやにやと笑っていたギンの金色の眉毛がピクリと動いた。

「ふう」

「ちよつと今ため息付いただろ!聞こえたぞ!!」

今のロイにとって自分の発言を妨げようとするものは全て敵であった。

「こんなことに何の意味があるんだよ!ていうかだいたい盗賊じゃねえじゃん!こんなところ誰も通らねえじゃん!なにも盗めねえじゃん!なにも盗まないおっさんたちを人は盗賊とは呼ばねえ、世捨て人と呼ぶんだよ!」

3日間たまりにたまった鬱憤。それが一気に噴き出した。

「あゝあ、せつかく頑張っているみたいだから剣の稽古でもつけてあげようかと思ったのに」

「は?何言ってるんだよ。わいてんのか!??」

ロイの人差し指が自分の頭を指す。

要するに『頭大丈夫ですか?』のポーズ。そんなロイに対してギンは静かに目を細め、口を開いた。

「だって君はいつか自立するわけでしょ?魔物を見たんだろ?わかってる?復活した魔物はあれだけじゃないんだよ。何年も前から人間はもう既に襲われてる。そんな世界で君は本当に生き残れると思ってる?無理だよ、それは。私達だってどうなるかわからない世界だよ。ここを出たら君なんか1週間と持たないよ。野垂れ死んで力

ラスの餌がせいぜいだ」

まくし立てられた言葉にロイは一瞬にして口ごもった。それは確かにわかつているのだ。ボンゴ以外を何も知らないロイが1人で生きていけるはずもない。分かっていたからこそ3日間苛立ちを抑えながら黙って働いていた。しかし、ロイ自身ですら何も考えていなかったロイの将来をギンはすでに見ていたらしい。

「あの日のあの村が初めてじゃないんだよ。もう何年も前からザイガは魔物に犯され始めている。こんなに増えたのはほんの数年前からだけだね。だから君は決して特別じゃない」

「・・・・・・・・」

知らなかった。ボンゴは他との交流が全くなかったから仕方がないのかもしれないが。ずっと自分だけが不幸なのだと思っていた。自分だけがこんな目にあっているのだと。

ロイは俯き、自分への情けなさから溢れる涙を拭った。

「また泣くの？君はもう子供じゃないんだよ？この3人が僕との生活を始めたのだって君よりずっと小さい頃だったし、私が魔物に家族と故郷を滅ぼされ、血肉をすすり、人を見たらまず奪うような生活を始めたのは9歳の時だ。君はもう子どもじゃないんだ。泣いている場合じゃないことぐらい察しなよ」

ギンの言葉が強く心にグザグザと刺さっていく。ギンの顔を見て、3人の顔を見た。ロイよりもずっと小さいころに絶望を背負いながらも生きることを選択した男たちの顔を。

ロイは涙を残らず拭くと、大きく息を吸った。

「すいませんでした」

「謝る必要はないさ。何も考えずに言ったことなのだからそれは君の本心だ。それが間違っているわけじゃない。ただ私が言いたいのには考えもなしに動くのもいいがそればかりではいけないという事さ。さて、冷静になったかな？じゃあ少し考えてみようか。君はこの世界を生き延びなくてはならない。そのためには力がある。どうだろう、君はそれはを望むかな？」

選択肢など始めからなかった。ロイは決して忘れていないのだ。あの日を思い出すたびに悲しみとともに湧き上がる激しい怒りを。

「・・・・・・・・はい」

思いを巡らせているうちに怒りの対象がギンから魔物へと変わっていた。拳に力を込めながらもロイはギンを見据えてそう言った。

「オーケー。大事な話がある。そこに座りなさい」

ロイが丸太に腰をかけると、ギンが話し始めた。

「さっき君が言っていたが・・・そう、私たちは盗賊ではない」

「やっぱり・・・・・・・・」

ロイは呆れた顔でギンを見た。

「ま、私は物心ついたときから盗人をやっていたから似たようなものだけどね」

微笑みながらギンは話す。そんな辛く苦しい経験をそんな風に語るのには時間が経験したからだろうか？それとも乗り越えたからだろうか？

「私とこの3人の関係は師弟だ。見えないだろうけど彼らは18歳、私は今年で24になる」

「ええっ!？」

どう見ても3人の方が老けて見える。ギンの見た目が非常に若々しいのもあるだろうが、3人が老けすぎだ。どう見ても実年齢の倍は生きているように見える。

「そして今、私たちはこの山に居座っている魔獣を追っている。ここに来る間に言った『牛みたいな生き物』と言うのがそれだ」

「魔獣？」

聞き慣れない言葉に聞き間違えたのかと耳を疑った。

「まあ、色々いるんだよ。そういうのは後で説明しようかな」

とにかく、カリューには何かがある。ようやくこんな僻地に身を置く理由に納得がいった。

「でもなんであんな達なんだ・・・ですか？」

「私たち4人だけじゃない、既にザイガ中で同志が活動している」

ザイガは世界の中心にボンゴやカリューがあるタンタニア大陸がある。その北東にバーカギル、北西にロスターニヤ、南東にジラビア、南西にクルシスそれぞれ大陸がある。中でもタンタニア大陸は巨大で、ほかの大陸全てを足しても半分ほどの面積もない。

「私たちの組織の創立者はカオスと共に戦ったものだ。カオスの予言を危惧し、この星に私たちを残した」

カオス。かつてこの星から暗黒の闇を取り払い、希望をもたらせし者。その伝説は小さいころから毎日の様に聞かされてきた。そのカオスと時を共に過ごしたという事は数百年前からある組織だということだ。

「まあ、割と名の通っていない組織ではあるんだけどね。私たちのような身寄りのないものも多い。むしろ魔物による遺児を積極的に集めている節がある」

ギンと3人、そしてロイの共通点。ロイの村を滅ぼしたのが魔物だったからこそ、ギンはこの話を切り出したのだろう。

「私たちの組織の名はジエルトンという。これは創始者、ウラル・ジエルトンの名前だ。そして・・・」

ギンは指を立てると「ちょっと待ってて」と言っ立ち上がり、奥の部屋へと入っていった。数秒後、何か棒状の物と、小さな木箱を持って現れた。棒状の物は1メートル以上あり、布にくるまれている。

ギンが棒の布を取ると、中から出てきたのは一振りの剣だった。1メートルほどの大剣。鍔は左右に開き、恐らく剣と聞いて誰もがイメージするだるう形である。鞘は黒く、柄の部分は横縞の模様が彫つてある。

木箱は開けずに剣の横に置いた。

「話の途中だったね。この木箱の中に入っているものは唯一私たちの身分を証明するものだ」

そう言っ木箱を開けた。中には銀色の指輪が入っていた。何も彫っていないシンプルなものだった。

「そしてこれは、君の誕生へのプレゼントだ」

そういつて剣を鞘から抜いて見せた。刀身はロイの後ろにある窓から入り込む光を反射し、眩しい。

ギンは剣をもう一度机の上に置くと、ロイの目を見据えた。

「君には、今から私たちの同志になってもらう」

「はい」

ロイもギンの目を見据えながら答えた。

「よろしく、ロイ」

覚悟は既に出来ていた。力を蓄え、魔物を討つ。それが今のロイの生きる意味である。この日から、ロイは戦いの世界へと足を踏み入れたのだった。

第2話 ウラル「ジェルトン」 2

「まずはここで剣を振りなさい」

剣を渡されてすぐにロイはそれを言われた。場所はというと小屋のすぐ目の前の野原だ。3人も3人で修業というものがあるらしいが、それは全く別の場所だ。ギンはとうとういつも通り椅子に座ってにやにやと笑いながらお茶をすすっていた。その様子に少しだけいら立ちながらロイは言われるがままに剣を振った。小さいころから木刀を振らされているのでこれくらいなら余裕だ。そんな風にたかをくくっていたのだが……。

「ゼエ、ゼエ」

まだ始まってから30分も経っていないのに、ロイの額には汗が止め処なく流れ続けていた。息が荒くなり、ペースはどんどん落ちていく。真剣がこれほどまでに重いとは思わなかった。鋼剣は見た目よりも軽いものの1/5?ほどある。それに加えロイの体にはあまりに長すぎるその刃にかかるモーメントがロイへの負担を何倍にも増幅していた。

「ここまでか」

ロイをずっと観察していたギンが目を細めた。

剣を振り上げた時に止まることができずに後ろにひっくり返って尻もちをついてしまった。

「……つつ」

ロイの右手は痙攣し、親指と人差し指の間はこの短い時間の間に肉刺ができ、つぶれて血だらけになっていた。ロイは剣を地面に置くと、激しく息をしながら。ギンの方へと目を向けた。

「20分くらいかな。まあ、いい方だ」

ギンは立ち上がってロイに近づいた。まじめな顔をしている。

「あと一ヶ月で2時間、今のペースで振り続けるようになってもら

う。もし、誰か、もしくは何かと対峙することになったとき、技術よりもまず体力がものを言う。体力の限界」死だ」

「精進します・・・お頭」

ロイの掠れながらも力強い声とその言葉を聞いてギンは肩をすくめた。

「わざわざヘルゲン達と同じ呼び方にしなくても」
いつのまにか微笑が戻っている。

「いや、兄弟弟子だからそっちのほうがいいと思ってるんすけどね」
「ま、いいや。じゃあ、がんばってね」

ギンは家の中へと入っていった。その姿を確認した後、ロイはゆつくりと立ち上がり、森の中へと消えていった。

「あれ？お頭、ロイはどこですかい？」

自分たちの修業から帰って来たヘルゲンが尋ねた。日はもう暮れかかっていて、山は赤く染められていた。

「あいつ今日の飯当番なんすけど・・・」

もつとも、昨日も今日も明日も明後日も当番はずっとロイのまま変わらないのだが。

「ロイなら表でちゃんと・・・」

ばててるよ。と言おうとしたが、その言葉はさえぎられた。

「いません」

先ほどまでロイを探していた三男のアンゴラが椅子に座るなり言った。

「え？」

目を向けるとそこには鞘に収まった剣が置かれていただけだった。ロイが剣になってしまったのではない限り、そこにはロイがいないことになる。

「逃げた・・・わけじゃない筈だけどな」

立ち上がって剣を拾う。柄の血は既に乾いていた。帰ってきたら手入れの仕方を教えてやらなければならない。帰ってくれば、の話だ

が。

その時、赤から黒に変わっていく道を走ってくる人影があった。

「すいません！手首が動かなくなっただので、足腰だけでも鍛えようかと思っただけ、思いの外遠くまで行きすぎて帰ってくるのに時間が掛かりました」

ロイだった。汗だくになつて、肩で息をしながらギンのもとへと駆け寄ってきた。その顔を見て、ギンはすぐに悟った。

「ロイ、ボンゴを見てきたかったんだね」

ロイは頷いた。

「もうあそこには戻れないし、ここにくる時は突然だったから、どうしても見ておきたくて・・・」

「それで、もういいんだね？」

「はい・・・じゃあ、飯作ります」

そういつてロイは厨房の奥へと入って行った。

握られたこぶしに力が入る。ギンたちとは比べ物にならないほどの小さなこぶし。それでも

「強く、なるんだ」

ギンとその横にいた三人は椅子に腰掛けた。ヘルゲンが尋ねる。

「ほんとにあいつも連れて行くんですかい？」

ギンは答えなかった。難しい顔をしたまま目を閉じた。

それから数日間、ロイは剣の振ることのできる時間を着々と伸ばし、体も一回り大きくなったようだ。そして素振りを始めて3週間後

「ハッ、ハッ」

やはり剣を振っていた。しかしほぼ三週間前と比べて振り下ろしから振り上げまでが格段に早くなり、形もより美しく洗練されつつあった。既にロイが剣を降り始めてから1時間が経過していた。

「少し暑いな」

毎日のように座つてロイを眺めているギンが呟いた。いつもはほと

んど汗をかかないギンが、日陰に座っていても暑く感じ、まるで汗を大量に流していた。

「異常気象かな？」

ギンは立ち上がり、屋根から出て太陽を仰いだ。しかし、太陽からはその暑さの原因は感じ取れない。むしろ正面から熱風が漂っている。そこにはロイがいた。

「暑くないかい？」

集中しているロイは反応しない。ギンはロイのほうへとまた一歩近づいた。すると、まるで炎の前に立っているような熱を感じた。

「これは……」

その熱はロイの体から発せられていた。しかし、ロイはいつもと同じようなシャツ一枚の体からいつもと同じように汗を流しているだけで、いつもと同じように剣を振っていた。だからそれに気付いたのはギンだけだ。

ギンは何か思いついたように目を見開くと、大きく頷いて息を吐き、小屋の椅子（ヘルゲンが言うにはお頭ポジション）へと戻り、お茶をすすりながらロイを眺めた。

「ロイ、2時間が経った」

「……えっ？」

ロイは言われたことが理解できなかった。脳の大半はまだ剣を振ることへと注がれていた。

「ロイ！ 終わりだよ」

言われたロイはようやく剣の動きを止めた。剣を地面に刺すと、その場に座り込んだ。周囲の空気はいつのまにか涼しい風へと変わっていた。

「まさか3週間でこなせるとは思ってもみなかったよ」

ギンにはこりと笑い、ロイはそれに笑い返した。

「楽勝っス……よ……」

ロイは疲労からか、その場に倒れこんでしまった。ギンはロイのも

とへ行くと、剣を拾った。まだかすかに熱が残っている。

「こんなに早いとは思わなかったな」

ギンは複雑そうな顔をする。そして自分の足元に倒れているロイを担ぎ、中に入っていた。

第3話 妖怪 1

ロイが出された課題をやり終えた次の日。

「今日も晴れてるな」

ロイは自室ベッドの上で目を覚ました。太陽が上がるか上がらないかといった時分で、まだまだ薄暗い。西向きの窓から見える空には雲がなく、しばらくこの快晴が続くことを示唆していた。

ベッドから起き上がると身体の節々がこわばっていた。

「えつと……。確か俺は課題をやり終え……。たんだよな？」

首をひねる。そこから先の記憶がない。まさかあれは夢だったのだろうか。

「あ、やべ。昨日の夕飯作ってねえや」

雑用が脳髓に染み込んでいた。考えるよりも先に朝食の準備をしようと思いなおし、厨房へと向かった。

それから数時間後、ロイはギンといつもの野原にいた。どうやら課題はちゃんと達成されたらしい。ロイは少し遅い達成感と次の修業への期待で胸を膨らませていた。ロイはおよそ真剣な目つきでギンの話を聞いていた。

「じゃあロイには次の修業に移ってもらう」

ギンがそう言いかけたとき、森の中から低いうなり声が聞こえた。その声があまりにも不快だったので、ロイは思わず身震いをしてしまった。

見るとギンの表情は先ほどのロイ以上に真剣なものになっている。その顔を見て、瞬時にこの声が目的の魔獣のものだと察した。

「ロイ、ここにいるんだ！」

声を上げたギンに対してロイは眉をひそめた。自分はギンが指定した課題をクリアしたのだから連れて行っても助けになる事はあっても足手まといにはならないはずだ。

「俺も行きます」

そのロイの強い目にギンも揺れ動かされてた。ロイに魔獣との戦いを見せることは大切なことだし、幸い魔獣ならそれほど手ごわい相手ではない。離れて見ていれば巻き込まれることはないだろう。

「わかった・・・来なさい」

ギンはそういつて駆け出し、ロイもそれに従った。今まで気付かなかったが、はためたギンのローブの中にはロイのものより遥かに長い長刀が隠されていた。

道の途中で合流したヘルゲンたちと共に、再度うなり声が響いた根源の方向へと向かった。3人もギン同様に真剣そのものの表情で走っていた。

「・・・・・・・・」

必死に走りながら、ロイはあの時の光景を思い出していた。村人が届くことのない距離で、村人を確実に殺せる水鉄砲を撃つ魔物。今からああいったものを倒しに行くのだ。自然にこぶしに力がこもった。

気付けばだんだんと4人の背中が遠のいていた。足腰には自信があったのに、これだけの距離走っただけでもう追いつけなくなっている。ロイは考えるのをやめて、ギンたちについていくことに集中する事にした。

その場所は、家からさほど離れていなかった。樹は明らかに力で根こそぎ倒された形跡があり、そこだけ見晴らしがよくなっている。これだけの面積があれば人が一度に何百人も泊まれる宿でもつくれるだろう。

しかしそこには魔獣の姿はなかった。広大な空き地の真ん中に一人の男が立っているだけだった。

「ここに大きな獣がいたのだが、知らないか？」

ギンが着くなり、息など微塵も切らせていない声で尋ねた。後ろでゼエゼエ言っしかなかったロイは無性に悔しくなる。

男はこちらを振り向き、切り株を気にしながらツカツカと歩み寄ってきた。

「私はこの近くに住んでいる者だ。大きな唸り声でしたので、ここに駆け寄ってきたのだ」

淡々とした、感情を全く感じさせない口調でそういった。表情は初めから無いかのように変わらない。

「何で急にいなくなっちゃったんだ？」

ヘルゲンは空き地の中央まで駆けていくと、およそ誰も答えを持っていないだろう質問を全員に向かって投げかけた。

「おい、あんた、何でもいい、なんか知らないか？大きな牛みたいな獣で角が馬鹿でかいんだ・・・」

「いや、すまないな。わからない。しかしここにも仕方がない。とりあえず私の家に来ないか？ここを抜けたすぐ向こうにあるんだ」
相も変わらぬ単調な声でそう言うと、ギンたち4人が立っている場所の後ろを指差した。ギンが了解して、来た道を戻り始めた。今の位置は先頭からロイ、オルソー、アンゴラ、ギン。そしてその後ろに男、ヘルゲンとなっている。

そしてギンが一步踏み出した瞬間。男の口元が卑しく曲がり。能面のように固まった。そしてその顔のまま振り返ると、ヘルゲンへと2、3歩近づいた。

「・・・っ!!」

その時ヘルゲンが見た顔は先ほどの男とは違っていた。耳は槍のように尖り、鋭い歯がむき出しになっている。そして視界の左から突き出された鋭い爪は、ヘルゲンの喉元を寸分の狂いも無く狙っていた。

オルソーはそれを見た瞬間、反射的に体を右側に寄せた、その爪は少量の血を残して空を切る。

「お頭っ!!」

その声に振り返ったギンの目に最初に飛び込んできたのは尖った男の耳だった。それに気付くと同時に右手を男の方へと突き出した。

「はっ！」

ギンの叫び声とともに風が巻き起こった。その風が男を吹き飛ばす。
「ぐわっ」

声を上げたその男はその先にあつた樹に顔からぶつかった。額から流れる血を口元で舐めながら振り向いた。その顔はさっきまでとは全く異なっていた。禍々しく、牙と尖った耳を持っている。

「妖怪、だな！」

ヘルゲンは、首の右側を手で押さえながら言った。

「ご名答。俺の名はガイガン。……妖怪だ」

男はその問いを待っていたかのように瞬時に答えた。だが、妖怪の特徴を残された書物で知っていた人も、妖怪が現れた話など聞いたことは無かった。もちろん妖怪という存在を目にしたこともない。
「なぜ、妖怪が……？」

ギンが呟くと同時に、ガイガンは言った。

「まあ、最後まで疑問もなく死にてえよなあ。教えてやる。魔天転器、だ」

表情も声の感情もさっきまでとはうって変わって楽しそうだ。

「マテンテンキ？」

聞いたことのない言葉にロイは眉をひそめる。

「知らねーのか？ どうやら後釜が育たなかったらしいな。人間は」
ロイをはじめ、そこにいる誰も意味が分からなかった。その顔を見て察したらしい。ガイガンは呆れたように手を広げた。その指先にある長い爪はなんでも切れそうなくらい鋭い。

「本当にしらねえのかよ。魔界とこの世界を転換させる媒介となるのが魔天転器だ。唯一、霊石である晶霊石だけはこの影響を受けないがな。……よりによって魔界の晶霊石の石切り場で転換が起るとはな。おかげでこっちに來たのは俺だけかよ」

「……！！」

疑問には思っていた。平坦になった森、爆弾で吹き飛ばされた家々、燃えたのであればその焼跡が、吹き飛んだのであれば残骸があたり

に散らばっているはずである。しかし、ボンゴを最後に見に行った時、その残骸はどこにもなかった。まるで世界から切り取られたかのように消滅していた。だから村人を弔う事は出来なかったし、形見の品を取ってくることもできなかった。

それにあの爆発。村を吹き飛ばすほどの爆発にもかかわらず、あの塔と、中にいたロイは無事だった。強固な石造りの中だから大丈夫、とかそんなレベルの爆発ではない筈だ。

その疑問はガイガンの答えによって解き明かされた。

妖怪の住む魔界というものがあるらしい。そしてそれとこの世界をつなぐのが魔天転器。ロイがその影響を受けなかったのは、あの塔が晶霊石できていて、その中にいたからということだ。そして目の前には代わりにこちらに飛ばされた妖怪がいる。

「じゃあ、向こうに飛ばされた人達は、生きているのか？」

魔界から飛ばされてきた妖怪が生きているのならば魔界に行った人々も生きているということになる。

ロイが声を上げるとガイガンの目がロイを睨んだ。しばらくしてそれは意地の悪い笑みに変わる。禍々しい表情をした妖怪はこちらの様子を逐一楽しんでいうようだ。

「俺は親切だから懇切丁寧に教えてやるよ。確かに俺と同じように飛ばされても生きていられる人間はいる。・・・实例もあるしな。だが、魔界じゃあ人間は餌か奴隷だ。人間はまずいから俺みたいに腹の減ってるやつしか食わないけどな。まあ、どの道お前たちはここで俺の餌だ」

希望にすぎる表情から一気に表情の暗くなったロイの前に出たギンが話を元に戻すべく聞いた。

「ここにいた魔獣を食ったのはお前だな」

ガイガンの口元が大きくつり上がった。

「ああ、美味かったな、あいつは。やっぱ魔物や人間は駄目だ。魔獣じゃなきゃ！でも俺まだ腹減ってるからよお、お前らの肉分けてくれよオ」

そう叫んでロイたちのほうへと飛びかかってきた。それを見た3兄弟は一斉に飛び出すと、次の瞬間、ガイガンを正面と左右から囲っていた。それはあまりにも突然の出来事で、ロイは3人の姿を完全に見失っていた。既に剣を抜いていた3人は、一斉にガイガンに斬りかかる。

「なにっ!？」

3人が切った剣には手応えは全くなかった。まるで布を切っているようだった。いや、ようだった、ではない。事実、ガイガンの肉体はそこにはなかった。着ぐるみのような上皮だけを3本の剣が貫いていた。

第3話 妖怪 2

「ガッ……！」

3人がほぼ同時に地面にうつ伏せに倒れた。服に血が滲んでいる。何か刃物に裂かれたようだ。いや、刃物ではない。ガイガンが生得的の持ち合わせている鋭い爪の仕業だった。

「……なるほど、この皮が、君の能力らしいね」

ギンがいつのまにか倒れている3人の近くにかがみ込み、穴が三箇所空いている皮を手についた。ガイガンはというとロイの左、15歩ほど離れたところにいつのまにか立っている。ロイにはまたしてもその動きは見えなかった。

ガイガンにはギンの気迫が伝わっているのか、先ほどまでの浮ついた表情は消えている。

「ああ」

おもむろに自分の顎の下の皮をつかむと、軽く引つ張った。それは音も大した抵抗もなくガイガンの顔から剥がれた。目や鼻、口の部分はただの穴だがそれ以外は髪の毛もある顔そのものだった。ガイガンの顔にはちゃんと皮が再生されている。

「そいつらは妖怪にも魔物と同じく能力があることは知ってるようだったが、俺の能力を“人間に化けること”だと勘違いしたな？」
ギンがガイガンの皮をつかんだまま立ち上がり、ガイガンのほうへ向き直った。その目はいつもの優しさなど微塵もなく、目があっただけで切り裂かれてしまうように鋭かった。

「お前には上皮を自在に操る能力がある。そうだな？」

「ご名答！」

ガイガンの体は一瞬ぶれて、消えた。ギンは剣を抜くと、同様に消え、次の瞬間には3人から5メートルほど離れたところで打ち合う音が聞こえた。見ると、ギンの刃とガイガンの短刀のように長く鋭い、赤く染まった爪が打ち合っている。ロイの耳に3度ほど打ち合

う音が聞こえたところで、ガイガンの声が聞こえた。

「さっき俺を吹き飛ばした風。あれはアンタのセイレイジュツだろ？知ってるぜえ。もう一度見せてくれよ」

ロイには意味がわからなかったが、ギンはロイの目の前でその目にも止まらぬ動きを止めて構えた。

「コオオオオ」

低い声を出し、剣を大きく横に振った。

「裂波！」

空気が泣いているように震えるのを感じた。

一瞬の出来事だった。ギンの剣が空を横薙ぎに切ったかと思うと、正面にあつた樹が次々と背を短くし、広場はさらに大きくなった。

「ハア、ハア………」

ギンは肩で息をしている。ロイはこんなに苦しそうなギンの顔を初めて見た。しかし、ギンのことを気遣うよりもまず混乱していた。

ロイの目にはギンの剣から何かが出て、それが樹を薙いだように見えた。だが、その「何か」が全く解らない。

「終わった」

ガイガンは背後に広がる木々と同様に、胴体が真つ二つに裂けて、仰向けに倒れている。その境目からは真つ赤な血が止め処なく溢れ出ている。ギンはロイのほうを振り返った。ようやくロイはギンの方に近付く。だが、ギンはまだ厳しい表情は崩しておらず、なんて声をかければいいのか決めあぐねていた。すると突然、

「ああ、終わりだ」

ガイガンの声が聞こえた。

ドスッ！

赤く染まったガイガンの爪が、ロイの胸の前で止まった。見上げ

ると、口から血を吹き出したギンが立っている。そして、ロイの顔にその血を吹きかけ、横向きに倒れた。

「ヒッ」

その後ろにはガイガンが立っていて、ロイを見下している。ロイは尻もちをつきながらその顔を見た。口元の歪みが見す感情は快樂以外の何物でもない。

「ロイ、逃げろ……」

ギンの声がかすかに聞こえた。しかしロイは恐怖で、立つことはおろか、その目をガイガンの顔からそらすこともままならなかった。

「これが俺の能力、『擬態』だ。皮だろうが目だろうが心臓だろうが脳だろうが俺は自分自身の複製を無限に作り出せる。加えてこの戦闘力。生まれながらにして存在する人間との差。……いくらセイレイジュツが凄くても人間ごときが妖怪にかなうわけがねえんだよ」

その言葉はいま自分が腹を貫いたギンに対してのものだった。そしてすぐにその爛々と光る目をロイに向けた。

「さあ、お前から食わせてくれ」

ガイガンの顔が歪んで見える。恐怖からか、ロイの目は次第に光の収集をやめ、やがて何も見えなくなってしまった。

ガイガンは表情の変化のなくなったロイに一步近づいた。そして大口を開けると、鋭い歯でロイの頭を包み込もうとした。

その瞬間、目もくらむほどの閃光が、ロイの額から放たれた。

ガイガンは3メートルほど後ろに飛びのき、ゆるりと立ち上がるロイを見た。目の焦点は合っていない、虚ろな目。意識があるように思えない。まるで糸に操られているかのように立ち上がっている。光が放たれた額には、中央を境につくられたシンメトリの紋様が赤く浮かび上がっていた。

「双竜のパターン、まるで……」

その先を言うよりも早く、ロイの体の右手が拳がり、ロイの口からロイのものとは似ても似つかない低い声が響いた。

「それは熱気だった。太陽に近づいたかのような熱が周囲を包み始めた。」

「バカな・・・!!」

ガイガンは明らかに動揺していた。熱はどんどん高まっていく。ロイの足元にあった切り株が干からびていった。その眩しい光に照らされたガイガンの額から、大粒の汗が流れている。それは熱気のせいだけではない。

「そんな、バカな。こんなガキにカオス様のお力が・・・・・・」
熱はロイを焦がさない。

「ロイはギンへと近づき、何かを呟いた。手をかざすと、腹に開いた風穴が乾いてゆく。そして傷口から溢れていた出血が止まった。おもむろにロイは立ち上がり、右手をガイガンのほうへとかざすと、低い声で叫んだ。」

「なっ！」

掲げられたロイの右手が陽炎で見えなくなった。あまりのも高められた熱。それがロイの右手を離れてガイガンのほうへ移っていった。熱の塊が、ガイガンの核、脳を貫き、全身を焦がした。

悲鳴が轟く。

第4話 精霊術 1

「・・・生きてる」

ロイはおよそ一ヶ月間慣れ親しんだ部屋で目を覚ました。どれだけ眠っていたかわからない。そもそもどうして眠っていたのかもわからない。とにかく寝すぎた時によく怒る頭痛がした。

「よつと」

気合いを入れて上体を起こそうとしたが、力が入らなかった。かろうじて手足は動いたので、体をよじりながら足を流し、ベッドの下へと着地させた。

「つつ」

両足へ体重を乗せると痛みが走った。なんだからここに来た日みただな、とひとりごちる。まるで足が体を支えることを拒絶しているかのような感覚。しかし、時間が経つにつれてそれにも次第に慣れ始め、座りながら足踏みができるくらいにはなった。

「コンコン」

ドアがノックされた。てつきり3人がロイを起こしに入ってくるものだと思っていたが、入ってきたのはギンだった。

「あれ？お頭妖怪にやられたはずじゃ・・・」

記憶がフラッシュバックする。ギンを貫き、身体の前で止まった鋭い爪。確かにギンはあの妖怪、ガイガンに腹を貫かれたはずだ。その証拠にギンは少しだけ腹を庇うようにしていた。だが、腹を貫かれたら庇って歩けるようになるはずがない。そもそも生きていること自体がおかしい。

いつものローブをまとっているギンはたいそう驚いた表情でロイを見ていた。

「ロイ、目が覚めたのか！？」

その言葉の意味がよく理解できなかった。まだ頭が廻っていないのかもしれない。

「ヘルゲン達なら、大丈夫だ。傷の一つ一つはそれほど深いものじゃなかった。出血は多かったけど、元々血の気が多いから、少し抜くぐらいがちょうどいいのさ」

ギンはふつと笑う。しかしロイはその言葉に笑い返す事はしなかった。

ロイの脳では焼きついている光景が繰り返して再生されていた。最後に自分を飲み込むべく開けられた妖怪の大口と、迫りくる死の恐怖が思い起こされる。

「夢じゃなかったんだ」

ロイの考えを察してギンが言い放った。

「ああ、現実だよ」

その光景を再度思い出す。そのたびに何もできなかった自分が情けなく思った。

「すいませんでした、俺足手まといになっただけで・・・」

「いや、そうじゃないかもしれない」

すっかりうなだれて謝罪したロイに言った。ロイはその言葉が全く理解できず、顔を上げた。

ギンは真剣な顔をして顎に手を当て、ロイを見ていた。

「あの妖怪が言った“セイレイジュツ”って覚えてるかい？」

そういえばそんなことを言っていた。ヘルゲンを襲おうとしたガイガン吹き飛ばしたあの風、そして木々を切り倒したあれの事を指しているんだろう。

「はい」

「実は、君もセイレイジュツが使えるんだ」

「は？」

ロイは目を丸くして、ギンの顔を見た。ギンは傍にあった椅子に腹をかばいながら腰掛ける。背もたれに寄りかかりながら顔の前で指を合わせた。

「少し説明するよ。今ではありえないとわかってるけど、太古には、風も日も水も光も全てのものには精霊が宿っているとされてきた。

そして、人間はそれを自在に操る力を持っている事を発見した。だから“精霊術”と呼ばれている。そして、君は、先日それを開眼した」

まったく身に覚えがないロイは、ギンが自分を謀ろうとしているのだと思い、ギンの真剣な表情を見なければ吹き出してしまふところだった。だいたい全く説明になっていない。そんなロイの意図を察したのか、ギンは続ける。

「君は夢中で気付かなかったかもしれないけど、剣を振る訓練の時のことだ。あまりの熱気で私は君に近づくことすらできなかった」ギンは一呼吸置き、続けた。

「そしてもうひとつ、まだ厳しい訓練も積んでいない少年が、あの重さの剣を2時間も振り続けることなど不可能だ。実はあれは術を開眼するための鍛錬なんだよ。というよりは精霊術を開眼する才能があるかどうかを見極める試験かな。もちろん精霊術は誰にでも使えるわけじゃない。開眼のためには類稀な集中力が必要とされる。命の危機も感じずに幸せに暮らしているような人々には難しいだろうね。だって、彼らは必死に強さを求めることなんてないんだから」そのギンの皮肉はどちらかというと自分自身に向けられている気がした。

「という事はお頭も？」

ロイの言葉に自嘲気味な笑みをやめて、深くうなずいた。

「そうだ、私も師の下で同じ鍛錬を行い、風によって力を使わずに剣を振り続けた。全身から熱気が発せられたという事は、君は恐らく熱によって全身の筋肉を活性化させたのだろう。しかし、こんなにも早く開眼させるとは思わなかった。正直驚いたよ。本当は2ヶ月はかかる」

「え？」

確かには一ヶ月と言われたはずだ。

「ああ、『あの』修業は一ヶ月なんだよ。“水”や“光”なんかだと、あの修業じゃ効果はないから別の方法で開眼させるんだ。もっ

とも、大抵の場合はその時点で諦めることが多いらしいけどね」

あまりにもぶっ飛んだ話で、なぜこんな説明をされているのかを忘れてしまった。ようやく思考が追い付いてくる。いや、追い付いていないのかもしれない。

「それで『そうじゃなかったかもしれない』って言うのは？」

ギンは指を鳴らした。

「そう、それだ。私があのだ場に目覚めた時、あの妖怪は炭になっていた。あれは自然の雷に打たれてもしない限り、焼かれたんだろ。うね。あの日は晴れていたし、あそこは人も通らないから、君が無意識の内にやったのではないかと思っっている。と言うか、それ以外の仮説が思いつかない。しかし、それもありえないことなんだがな。君の小さな身体に妖怪を焼き尽くすほどのエネルギーがあるとは思えないし、仮にあつたとしても都合よく発動するはずがない。ハッピーエンドが待っている物語じゃないんだから」

「お頭の傷は？」

ギンは首を横に振った。

「わからない。目覚めたら動ける程度には回復していた。まだかなり痛いけど。と言うわけで、何か“運が良かった”と考えよう。こうして全員生きていたわけだし」

急に笑顔になり、手をたたいた。

「楽天下すぎだ！」

思わず突っ込んでしまった。同時にごほと咳き込む。しばらく使われていなかった喉をいきなり動かしたからだろう。しかし、考えても結論が出ないものは仕方がない。

「あつ、そういえばあれから何日経ってるんスか？」

「ん、ああ、3日だよ」

ロイの頭の中で何かが崩れ落ちる音がした。せめて、もう一日早く起きていれば……。肉の焼ける匂いが頭の中でこだまする。

「あの日の夕食になる予定だった、獣の肉は？」

ガイガンが現れた日の午前中にヘルゲン達が狩ってきた獣の肉だ。

「・・・・・・・・」

「えっ、俺え？3日昏睡状態にあってたっただ目覚めたばかりだぞ！」

4人を見回した。ヘルゲンは、痛そうに右手を庇い、オルソーは右手で目を覆い、アンゴラは胸を押さえた。そのタイミングは全く一緒で、恐ろしいほどの血のつながりが感じられた。

「わざとらしっ！」

ぼそっと呟いたロイの声を合図に、

「イタタタタ」

各々の怪我の箇所を押さえながら、ステレオで言った。

「ちえ、・・・お頭は？」

ロイがギンの方を向くと、やはり輝かしい笑みを呈しながら言い放った。

「何で私がお前たちの飯を作らなくちゃならないんだい？」

「・・・・・・・・」

結局ロイが昼飯を作ることになる。とんだ雑用根性だった。炊いた米を湯の中に入れ、野菜添えて味噌で味を調えた。

「いやあ、やっぱりロイの料理は美味しいなあ」

そうギンが言ったところで気づいたが、

「あれ？昨日までの飯は・・・？」

一斉に目をそらされた。やっぱりか。

「交替で作ったんだろ？」

目はそらしたまま、木のスプーンで飯を口に運び続けた。ギンは食べ終わると、

「いやあ、やっぱりロイの料理は美味しいなあ」

ロイがじろつとギンを睨んだ。

「あつ、そうだ、精霊術のことだけど」

ギンが唐突に話を振った。100%逃避のためだと思うが、『精霊術』という言葉に敏感に反応したロイは、そのことには気付かなかった。

「君の“熱”の術の修業には同じく“熱”の師が必要だ。幸い私の知人に“熱”の術者がいるから手紙を書いておいたよ」

ギンは新聞や手紙やは伝書鳥で行っている。大抵は鳶や鷹を使うことが多い。頻繁に紛失するらしいが、スピード重視という事らしい。

「多分結構時間がかかるだろうから、それまでは・・・」

そういうと、思い出したように立ち上がり、剣と指輪を出した部屋に入り、何かごそごそやりだした。

ボフ

「うわっ！」

扉からほりりが吐き出された。どうやら中は相当汚らしい。見たくない。掃除をしたくなってしまうから。

「・・・・・・・・」

染み込んだ雑用根性を取り除かれる日は来るのだろうか。

2、3分ほどして、ギンはなにやら色あせた分厚い本を持って出てきた。それを机に置くと、辛うじて表紙の「real world」と言う手書きの文字が見て取れた。

「これはジェルトンが残したもので、私たちの教典にもなっている。もつとも、これは写本だけだね。読みなさい」

ロイの顔はさつと曇った。幼い頃から家にいるのが苦手だったロイは、本を読めるほどじつとしていられなかった上に、村に本自体が稀少だったため、今までほとんど本など読んだことはない。ばあちゃんに字は教わってはいるが・・・。

「マジで全部読むんすか？」

「マジで全部読むんだよ」

「このクソ分厚い本を？」

「このクソ分厚い本をだよ」

「・・・・・・・・」

間を空けないギンの返答が有無を言わせないことを物語っていた。ロイは深く溜息をついた。

「わかりましたよ、ええ読みます。読みやいいんでしょ！」
大声で言って、立ち上がり、本を脇に抱えると、大またで部屋へと
はいつていった。背後から、くつくつと笑う声が聞こえた。

第4話 精霊術 2

表紙をめくると、予想通りの黄ばんだ紙と、黒いインクの手書きの文字が出てきた。不本意だったが、ロイは祖母の教えを思い起こしながらゆっくりと読み始めた。

「この世は5の種族からなっている。すなわち人間、妖怪、獣、魔獣、魔物

人間とは地上に生き、術を使うもの。妖怪とは地上に生き、能力を持つもの。獣は世界に生き、4の種以外の全てを指す。魔物は能力を用い、魔獣は用いない」

魔獣と獣の定義は曖昧だと注意書きがされていた。生命力や凶暴さなどが基準になるらしい。

ここまで読んで、ようやくロイは自分がこの本に釘付けになっている事に気がついた。この本には、まさしくロイが今一番知りたいことが記されていた。

その下は、目次のようなものになっていた。写本と言っていたが、随分汚れていたので、写本自体が相当古いものなのだろう。

目次にある世界の地形のことがロイの興味をそそったが、まずは“術”について読むことにした。

“術”は妖怪や魔物の持つている“能力”と違って生まれたときから備わっているものではないらしい。ギンが「開眼」と言っていたのも頷ける。中には開眼できない者もいるらしく、“風”や“熱”のほかに“水”や“光”など多種多様だ。しかし、その詳しいことは書かれていなかった。

ほかにも戦術なども参考になった。特に剣術については、知らないようなことも多かった。ただ、「先に体術を学べし」と書いてあり、体術のマスターを前提とした内容であったので、足がまだ完全には治っていないことも考え、後回しにする事にした。

「ふう」

ロイは天井を仰ぐと、溜息をついた。読解できなくて読み飛ばしたところも多いのだが、一通りは読み終えた。本と言うより事典に近い。ロイは軽く伸びをすると、何か簡単にできる事がないかと、体術の章を眺め始めた。

「入るよー」

ロイの返事も待たず、ギンはドアを開けた。

「な、何してるんだい？」

ロイは床に寝転がっている。仰向けの姿勢から左右交互に向きを変え、その都度掌で床を叩いていた。

「・・・受身の、練習です」

ロイはがばつと起きて、床に座ると、少し気恥ずかしそうぼそつと言った。

「ああ、なるほど、いや、大事だよ、受身は。もう読んだのかい？」

ロイは「一通りは」と言うと、立ち上がった。まだ足が本調子じゃないので、ゆっくりとではあったが、もう痛みはほとんどない。

「ロイはせっかちだから、剣術から入るかと思ったよ。じゃあ、その本貸すから、うまく使うといいよ」

「はい」

ギンはニツコリと微笑むと、両手を重ねて腹の上に置いた。

「ああ、そうだそうだ。お腹が空いたなあ」

「またスか・・・」

ギンの表情は変わらない。それは依頼ではない。強制だった。何しに来たのかと思えばそう言う事か。ロイは心の中だけで嫌味を言った。

「はあ・・・わかりましたよ」

ロイは胃にも穴を空けられればよかったのに、と思いながら先に部屋を出た。ギンは部屋のドアを閉めて、微笑みながらロイの後に続いた。

「あ、そうそう、ロイの先生なんだが、1週間後に来るらしい」

食後に、ロイが一番気にかけている事を適当にギンは言い放った。あろうことか爪の垢を取りながらという適当っぷりだ。

「どういう人なんスか？」

今度はお茶をすすりながらギンは言った。

「カルコンってやつだ。私とは幼馴染でね。多分“熱”の術だったら5本の指に入るだろうね」

ジエルトンの規模を知らないので「5本の指」が果たして凄いのかどうかはわからなかった。

「じゃあ、お頭はどれぐらいなんスか？」

「さあ」

軽く流された。

「カルコンは確かに術者としては凄いけど、でもなあ・・・」
何事もなかったかのように受け流す。さすが“風”の術者だ。

「でも？」

ロイは控えめに聞いた。

「最悪、死ぬかもよ？」

「えっ!？」

ギンは最後に最も聞き捨てならないことを言い置いて、立ち上がった。自室に入っていた。最後に振り返った。

「じゃあ、体術がんばれ」

ボタン

誰も物音を立てない部屋に、扉を閉める音だけが響いた。

1人残されたロイはつぶやく。

「・・・まじかよ」

第5話 カルコン 1

靴が砂を踏みしめる音が響いた。それ以外の音は何もない。ロイは何も持っていない両腕を構え、ヘルゲンと対峙していた。アンゴラとオルソーは近くに座って眺めている。

ロイが砂を蹴り出し、5歩でヘルゲンの間合いに入り、右フックを繰り出した。身長差でそれはフックというよりもアッパーに近いものになる。ヘルゲンは少し口をほこばせながら、頭を少し後ろに下げ、それを避けると、腕を下げ、右アッパーを返した。

「・・・・・・・・っ!!」

豪快に音が鳴った。ロイはよけるために後ろに飛び、ほぼ元いた位置に戻った。

もう一度踏み出すと、ヘルゲンへ向かって突進する。ヘルゲンはそのタイミングを合わせて右ストレートを繰り出した。

「・・・・・・・・!!?」

その右手は空を切った。刹那、ヘルゲンはロイの姿を見失う。沈み込んで拳を避けていたロイはその隙を逃さずヘルゲンに足払いをかけた。

「おわっ!」

ヘルゲンの体は前のめりに倒れそうになる。それをロイは支えようと倒れる勢いを使って背負い投げした。

ヘルゲンは地面に仰向けに倒れた。そのままの姿勢でロイを見た。

「ぶはははは、負けた」

「勝った!」

ロイは嬉しそうに顔を綻ばせている。ちなみに対戦成績はこれで1勝49敗である。

「随分いい動きになったじゃないか、ロイ」

突然出てきたギンはロイを称賛した。ちなみに昨日までは、「まだ、勝てないのかい?」とかロイを馬鹿にし続けていた男である。

「勝ったつスよ、お頭。これで剣術教えてくれるんスよね!？」

聞きしてロイが言っと、ギンは腰に手を当て、バキバキと鳴らした。雰囲気だけでなくしぐさまで年よりじみている。

「まあ、ぶっちゃけめんどくさいけど、約束だ、教えよう」

「ぶっちゃけすぎです」

「じゃ、昼飯の後にしよう。さあ、今日は何？」

ロイは、後ろの3人を見ると、一斉に「あいたたた」と、それぞれ怪我していた箇所を押さえ出した。

「うそつけっ！さっき人殺しそうなパンチだったぞ!！」

「あれで肩いったんじゃねえか？アンゴラ、診ろよ」

「折れてる」

小芝居を始めた。

「・・・・・・」

ちなみにロイの料理の腕は他の誰よりも上がっていた。特技としては重宝することなのだが、何となく悲しくなってくる。

「まずひとつ言っておく、剣は何かを傷つけるためのものじゃない。自身を守るためのものだ。それだけは肝に銘じておきなさい」

ギンが真剣な表情で言った。

「はい」

ロイもそれに答える。

「実践剣術は、型がそう多くはない。達人になればなるほど勝負は一瞬でつく」

ゴクリとロイは唾を飲んだ。真剣な表情だけに修業への期待が高まる。

「私は相手なんかしたくないから、この樹を斬りなさい」

ギンは相変わらずぶっちゃけながら家の近くの樹の幹を叩いた。

「はあ」

なんか自分ひとりでもできそうだ。とはいえ、結構太い樹だった。絶対無理である

「お頭、まず手本を見せてくださいよ」

ギンは心底嫌そうに剣をローブから出した。ロイのものよりずっと細身の剣だ。

その樹の前に立った。そして剣を抜いた
シュン

ギンが剣を納めると、その樹は切り株になっていた。あまりの早業に、ロイにはいつ斬ったのかすら見えなかった。

「・・・・・・・・」

「まあ、こんなところだ。とりあえずは一振りで切れるようにすることだね。実践剣術についてはカルコンが教えてくれるよ。頑張てね。はっはっは」

ギンは笑いながら踵を返し、家の中へ入っていった。

「・・・・・・・・」

ロイは倒された木を見る。滑らかな切り口で、むしろもともとこんな形だったと言われた方がしっくりくる。だいたい手本にはなっていない。ロイにどうしろというのだろうか。

「はあ、はあ」

数時間後、ロイは自分の目の前にある大木を眺めた。何本も切れ込みが入っているが、どの太刀筋も4分の1もいかないところで途絶えている。

「無理だろ、これ」

どさつと音を立てて、ロイは芝生の上に仰向けに倒れた。全く斬れないので、ギンはトリックでも使ったんじゃないかといぶかしみ始めた。掌を見ると、また肉刺がはげて、血まみれになっていた。

息を強く吐いて立ち上がり、地面に刺してあった剣をつかんだ。右から刃を入れると、案の定、刃はほんの少しで止まった。

「・・・駄目だな、それでは」

背後から声がした。低く腹の底に響くような声だ。ロイが後ろを振り返ると、背の高い男が立っていた。色も黒く、どこことなくガイに

似ている。ロイは目をこすった。しかし、やっぱり自分の父親とは違う。少なくともガイはもつと表情豊かだ。目の前の男は無表情で暗く濁った眼をしている。

「脇をしっかりと締め、下半身を安定させろ。そして・・・」

男は一回そこで区切った。

「剣を研げ」

その言葉にハツとして剣を見ると、刃がボロボロになっていた。恐らくもらった時から相当刃こぼれしていたであろうが、むやみやたらに叩きつけすぎたということだろう。

「・・・あっ！」

ロイはそこで始めて突然現れた男の正体に気が向いた。

「もしかして、カルコンさん・・・ですか？」

「そうだ。お前がロイか？」

「はい。えつと・・・」

ロイがカルコンの雰囲気にも息苦しさを感じていると、家からギンが出てきた。

「やあ、カルコン。よく来てくれたね。ああ、その子がロイだよ」

堅苦しい雰囲気なぶち壊し、カルコンと挨拶を交わした。

「ギン。久しいな。魔獣退治の任務は終わったのか？」

任務。と言言葉が気に掛かった。「ジェルトン協会」みたいなのがあって、任務が出されるのだろうか。

「ああ、妖怪が出てきてやばかったけどね」

ギンはまったくやばそうにもなく、肩をすくめて答える。それを聞いたカルコンは表情を変えずに眉を動かした。

「妖怪、だと？」

「ああ、なぜか知らないけど灰になってね。まあ、倒したんだろうね」

それを聞いて、カルコンがちらりとロイのほうを見やった。しかしロイには身に覚えのないことだ。未熟な自分がやったはずがない。いたたまれなさを感じて、視線を樹の方に戻した。

「どうかしたかい？」

「・・・いや、なんでもなし。無事で何よりだ」

カルコンが少しだけ微笑んだ。旧友の無事を喜んでいるのだろうか。
「すまないが、用ができた。ここには半年ほどしかいられない」

それに関係あるのはロイだが、カルコンはギンに向かって言った。

「半年か・・・。厳しいな。修業は完成しないな。だが、基礎さえ
積みばあとは独学でも何とかなるか。・・・いいね、ロイ」

ロイはギンの質問に頷いた。

3人とカルコンは既に見知っていたらしい。ロイはすぐさま3人に
剣の研ぎ方を教わり、研いだ。その後、修業は明日からという事にな
り、ロイは6人分の夕飯を作るはめになった。カルコンは表情1
つ動かさず、何の感想も言わずにロイの手料理を平らげた。

父親に似た無口無表情な男。それが師匠への第一印象だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9454y/>

Disturbed Hearts

2011年12月1日20時58分発行